平成３０年度　社会福祉振興助成金事業報告書１

若年性認知症の人のための生きがいづくり

特定非営利活動法人認知症の人とみんなのサポートセンター

平成３１年３月発行

WAM助成　独立行政法人福祉医療機構
社会福祉振興助成事業

平成３０年度　社会福祉振興助成金事業報告書１
若年性認知症の人のための生きがいづくり

はじめに　1

１．就労支援アセスメントシート普及のための事例集づくりと研修　2

２．居場所づくりを実際に行えるようになるためのプログラム研修　6

（１）研修プログラムの内容　6

（２）アートワーク展とワークショップ　11

３．「タック」の各プログラム継続と「タック」を実習の場とした人材育成　12

（１）実習受け入れ　12

（２）プログラムの継続
①ぱーくすカフェ　13
②脳とからだのワーク　16
③言語療法　21

４．「タック」メンバーによる当事者相談　『タックドア』　23

５．連絡会　25

６．報告会　25

はじめに

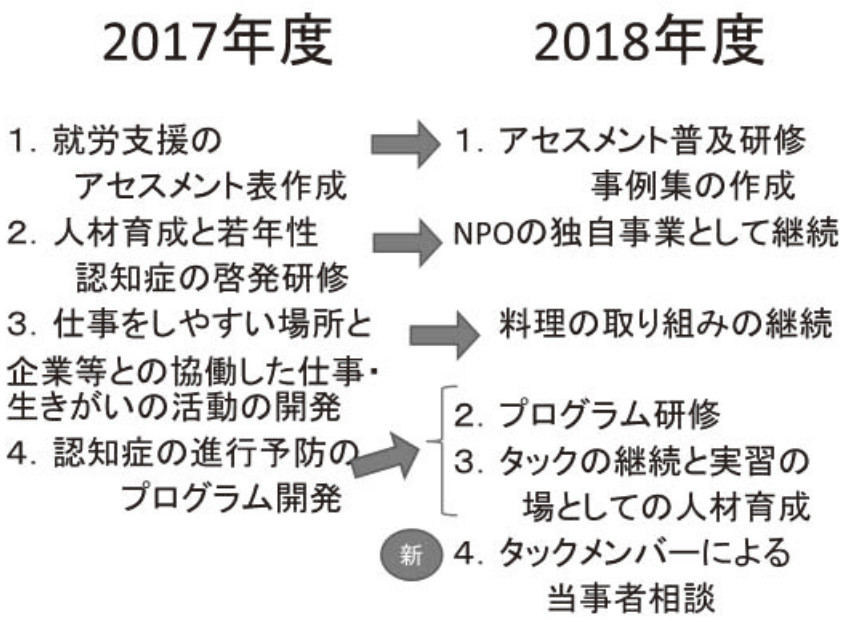
本年度は、2017 年度の事業を基に、事業をより発展させた。

2017 年度に作成した「就労や生きがいづくりのアセスメント表」を使用し、普及研修と事例集の作成を行った。また、昨年行った「人材育成と若年性認知症の啓発研修」は、法人の独自事業として継続して行った。今後も継続していく予定である。

「仕事をしやすい場所と企業等との協働した仕事・生きがいの活動の開発」は、昨年行っていた料理の取り組みを独立運営で別の団体で継続中である。企業への働きかけは、本年度より新しく行った、タックメンバーによる当事者相談「タックドア」の中で、メンバーの発案から製薬会社の人へのプレゼンテーションを行うことで継続している。

認知症の進行予防のプログラム開発は、「プログラムを学ぶ研修」や「タックの継続と実習の場としての人材育成」としては発展継続した。研修には、延べ 74 名の参加があった。特に、12 月に行った「ぱーくすカフェ」の研修では、タックのメンバーも参加してもらい、実習も兼ねた研修とした。

具体的な成果物としては、「就労や生きがいづくりのアセスメント表」を使用した事例集の作成と、言語療法の実践を基に「言葉のサポートブック、意味性認知症を中心に」を作成した。「言葉のサポートブック」は、新聞に掲載されたところ、150 件以上の問い合わせがあった。



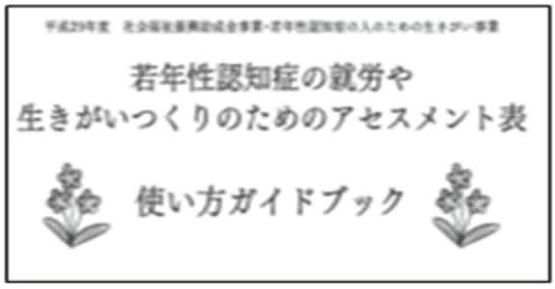
今後は、2018 年度の成果を基に更に下記のように事業を継続していきたいと考えます。

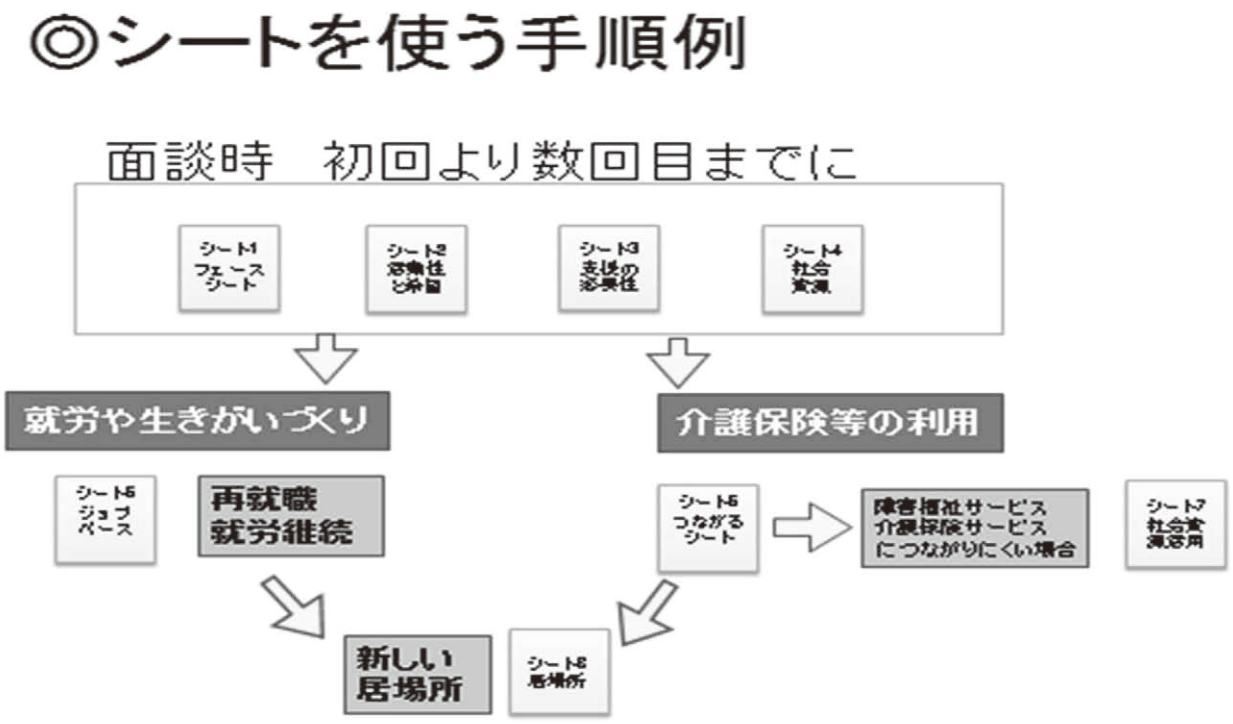
・アセスメント表の普及と研修を継続する
・言語療法と、言葉のサポートブックを使った研修を継続する
・ぱーくすカフェを継続する
・脳とからだのワークのプログラム化の研究と研修を行う

１．就労支援アセスメントシートの普及のための事例集づくりと研修

当法人が以前作成をしていた「若年性認知症の就労や生きがいづくりのためのアセスメント」シートに合わせて前年度、「ジョブベースづくり」「居場所や作業の場つくり」のシートを作成した。本年はそれらのシートの普及のために若年性認知症コーディネーター数名が支援の中でシートを活用した例を冊子にまとめ、事例報告とシートの使い方の研修を行った。2019 年度第 20 回日本認知症ケア学会で発表予定である。

□シート１　フェースシート
□シート２　活動性と希望の変化
□シート３　支援の必要性を知るシート
□シート４　社会資源活用
□シート５　ジョブベースづくり
□シート６　つながるシート
□シート７　社会資源利用の可能性が低い場合のサポート
□シート８　居場所や作業場所の場つくり





（1）事例集づくり

検討会を東京、大阪各 2 回（計 4 回）開催し、各出席者の事例を元に検討会を行った。検討した事例を元に事例報告集を作成した。

就労支援アセスメントシートの普及のための事例集作り検討会及び内容

事例集作り検討会では、目的は若年性認知症の人への支援に役立てられるということ、生きがいづくりと、就労の両面の事例掲載、若年性認知症の人の就労支援の課題を明確にするなどの意見があった。

① 7 月 31 日（日）13:30～16:00 東京（東京八重洲ホール 513 号室）

出席者 駒井由起子氏（NPO 法人いきいき福祉ネットワークセンター・東京都若年性認知症総合支援センター）
伊藤 耕介氏（東京都多摩若年性認知症総合支援センター）
松倉 典子氏（若年性認知症サポートセンターゆえみ：青森県）
沖田 裕子（当法人）
杉原 久仁子（当法人）

内 容 事例紹介 事例集のイメージ共有 研修について

② 8 月 21 日（火）13:30～16:00 大阪（当法人事務所）

出席者 鬼頭 史樹氏（名古屋市認知症相談支援センター
三木 信子氏（ひょうご若年性認知症生活支援相談センター）
沖田 裕子（当法人）
杉原 久仁子（当法人）

内 容 若年性認知症の人専用の「就労支援アセスメント表」を利用した事例集と研修に関する意見交換

③9 月 14 日（金）16:00～18:00 大阪（当法人事務所）

出席者 鬼頭 史樹氏（名古屋市認知症相談支援センター）
中牟田なおみ氏（ひょうご若年性認知症生活支援相談センター）
沖田 裕子（当法人）
杉原 久仁子（当法人）

内 容 事例集について 研修について 今後の予定

④10 月 27 日（土）10:30～13:00 東京（TPK 神田ビジネスセンター）

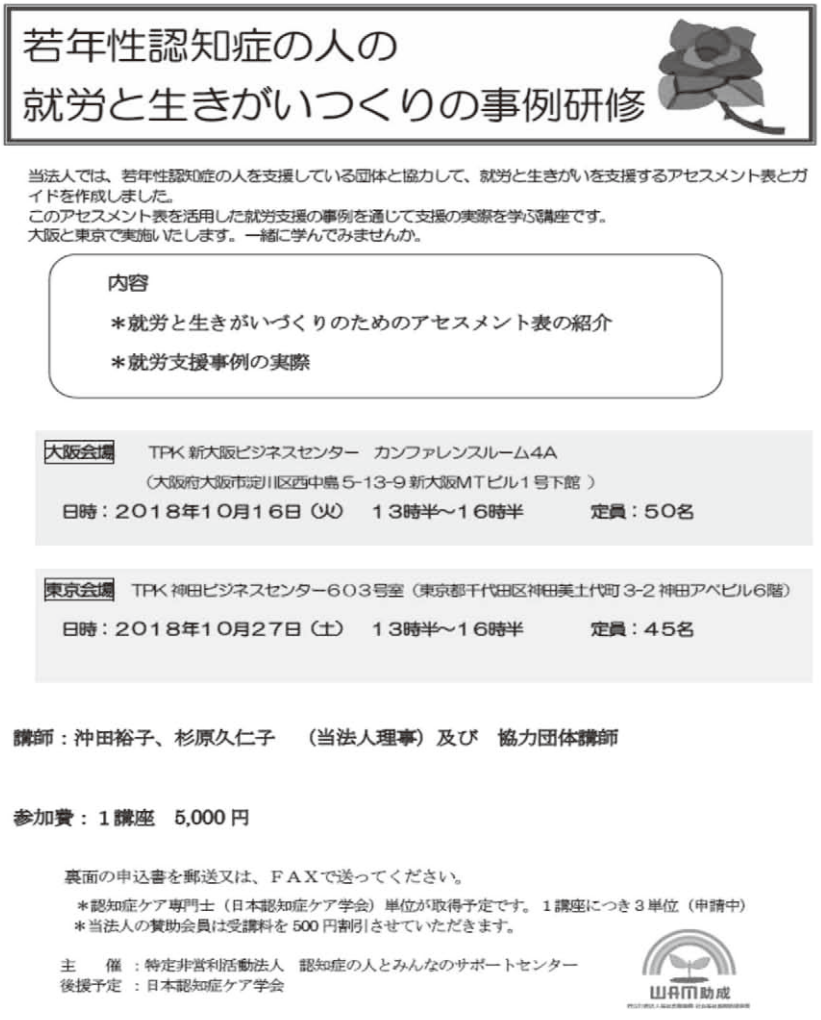
出席者 駒井由起子氏（NPO 法人いきいき福祉ネットワークセンター・東京都若年性認知症総合支援センター）
来島みのり氏（東京都多摩若年性認知症総合支援センター）
伊藤 耕介氏（東京都多摩若年性認知症総合支援センター）
沖田 裕子（当法人）

内 容 若年性認知症の人専用の「就労支援アセスメント表」を利用した事例集と研修に関する意見交換

（2）アセスメントシートと事例集を用いた研修

アセスメントシートを活用した就労支援と生きがいつくりの事例を通じて支援の実際を学ぶ講座を行った。

日	テーマ・内容	講師	場所	受講人数（名）
6 月 2 日（土）大阪	若年性認知症の人の支援研修 生きがいづくり活動とアセスメント表の使い方（当法人独自研修）	沖田　裕子	大阪市社会福祉研修情報センター	22
10 月 16 日（火）大阪	就労と生きがいづくりのためのアセスメント表の紹介　就労支援事例の実際 大阪研修	中牟田なおみ 沖田　裕子 杉原　久仁子	TPK 新大阪ビジネスセンター	20
10 月 27 日（土）東京	就労と生きがいづくりのためのアセスメント表の紹介　就労支援事例の実際 東京研修	駒井　由紀子 来島　みのり 沖田　裕子	TPK 神田ビジネスセンター	6



若年性認知症の人の
就労と生きがいつくりの事例研修

当法人では、若年性認知症の人を支援している団体と協力して、就労と生きがいを支援するアセスメント表とガイドを作成しました。
このアセスメント表を活用した就労支援の事例を通じて支援の実際を学ぶ講座です。
大阪と東京で実施いたします。一緒に学んでみませんか。

内容
＊就労と生きがいづくりのためのアセスメント表の紹介
＊就労支援事例の実際

大阪会場　TPK 新大阪ビジネスセンター　カンファレンスルーム4A
（大阪府大阪市淀川区西中島 5-13-9 新大阪MTビル1号下館）
日時：2018年10月16日（火）　13時半～16時半　　定員：50名

東京会場　TPK 神田ビジネスセンター603号室（東京都千代田区神田美土代町 3-2 神田アベビル6階）
日時：2018年10月27日（土）　13時半～16時半　　定員：45名

講師：沖田裕子、杉原久仁子　（当法人理事）及び　協力団体講師

参加費：１講座　5,000 円

裏面の申込書を郵送又は、ＦＡＸで送ってください。
＊認知症ケア専門士（日本認知症ケア学会）単位が取得予定です。１講座につき３単位（申請中）
＊当法人の賛助会員は受講料を 500 円割引させていただきます。

主　催　：特定非営利活動法人　認知症の人とみんなのサポートセンター
後援予定　：日本認知症ケア学会

WAM助成

アンケート結果

10 月 16 日（火）大阪研修						
研修の満足度	とても満足		満足	やや不満		不満
人数（名）	１０		１１	0		0
良かった点	１）役立つ情報が得られた	２）日頃の生活や活動に役立った	３）スキルアップ	４）他の参加者との交流	５）問題、不安の解消	６）その他
	１６	6	１１	4	0	2

10 月 27 日（土）東京研修						
研修の満足度	とても満足		満足	やや不満		不満
人数（名）	4		1	0		0
良かった点	１）役立つ情報が得られた	２）日頃の生活や活動に役立った	３）スキルアップ	４）他の参加者との交流	５）問題、不安の解消	６）その他
	6	4	1	1	2	2

自由記述

- ｱｾｽﾒﾝﾄｼｰﾄを使っていきたい。ﾀｯｸに一度遊びに行きたい。私にできることがあれば、活動のお手伝いをしたい。
- 自分自身の振り返りの機会になった。
- 実際にﾜｰｸをして理解を深めたかった。
- ｱｾｽﾒﾝﾄの視点の幅が広がったように思う。若年性認知症の方との接点がないので、少しｲﾒｰｼﾞするのが難しかった。
- 使用する時期とか関係なく、長く関ってきた方々にも使いたいと思う。ｱｾｽﾒﾝﾄ表を中心にチーム作りが必要と感じた。居場所、事業所、家族等々
- ｼｰﾄで変化が見える事で支援者どうし情報共有できると思った。本人、家族の思いが点数化されることでわかりやすい反面、支援の限界を感じてしまいそうである。
- 今回で3回目の研修です。毎回、現実感があってとても分かりやすい。また参加したい。
- 経験や知識だけにとらわれず、自分の五感と「かん」を大事にして行こうと思う。
- 8 つのｼｰﾄの意味合いを考えて、今後(その場ではシートを利用しないとしても)頭の中で整理しながら、投げかけや本人の気付きを増やして行けたらと思う。地域では、若年性認知症の方自身がどこにも繋がっていない(発見できていない)ので広報していきたい。
- 大変勉強になった。
- 認知症ｹｱ学会(2018)で会の存在を知り参加した。SW養成しているが、これからSWになる若い学生も知っておく必要があると思い参加した。なかなか 1 回では分からないと思うので、継続して参加できたらと思う。いろんな制度を知っていないとだめですね！勉強になった。
- ｶﾞｲﾄﾞﾍﾙﾊﾟｰや就B、居宅介護の人向けの研修を開催したいと思っている。(ﾋﾟｱの方と一緒に)神奈川に来て頂けるでしょうか？
- 他の研修も参加したいが、遠方でもあり、日程と旅費の部分で参加できるなら、又参加したい。

２．居場所づくりを実際に行えるようになるためのプログラム研修

昨年からのプログラムの実施より、本人へのサポート方法（緊張の緩和、家族の関わり方の調整、言語障害のサポート等）が明らかになってきた。プログラムを通してのサポート事例及びプラグラムの実施方法を研修で伝え、他の地域でも居場所づくりが行えるようにすることを目的とした。

（1）研修プログラムの内容

日	テーマ・内容	講師	場所	受講人数（名）
9月7日（金）	若年性認知症の人のための生きがいづくりﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ研修２　脳とからだのﾜｰｸ	堤　奈津子 沖田　裕子	スタジオフロイデ	7
9月29日（土）	若年性認知症の人のための生きがいづくりプログラム研修３言語療法	安井　美鈴 沖田　裕子	ドーンセンター	19
12月22日（土）	若年性認知症の人のための生きがいづくりプログラム研修１ 認知症カフェのつくり方　カフェ体験	平井　美穂 山本　直美 杉原久仁子 タックメンバー	大阪市社会福祉研修情報センター	23

アンケート結果

9月7日（金）脳とからだのワーク						
研修の満足度	とても満足		満足	やや不満		不満
人数（名）	5		2	0		0
良かった点	1）役立つ情報が得られた	2）日頃の生活や活動に役立った	3）スキルアップ	4）他の参加者との交流	5）問題、不安の解消	6）その他
	3	3	4	2	4	0
9月29日（土）言語療法						
研修の満足度	とても満足		満足	やや不満		不満
人数（名）	20		19	1		0
良かった点	1）役立つ情報が得られた	2）日頃の生活や活動に役立った	3）スキルアップ	4）他の参加者との交流	5）問題、不安の解消	6）その他
	34	20	18	2	1	2
12月22日（土）認知症カフェ体験						
研修の満足度	とても満足		満足	やや不満		不満
人数（名）	6		6	1		0
良かった点	1）役立つ情報が得られた	2）日頃の生活や活動に役立った	3）スキルアップ	4）他の参加者との交流	5）問題、不安の解消	6）その他
	6	5	2	7	2	2

アンケート自由記載

１．脳とからだのワーク

- 不安で呼吸していない事に気遣い
- 体をゆっくり自分自身を知ることで、いろいろなことが良くなること等、たくさん学んだ。(やはり、自分の姿勢を治すことの大切さが分かり、体操やﾖｶﾞなど、自分をまず治さなくてはと強く感じた。)
- 自分の心と体を緩める事、世界とつながっている事に気付くことでとても楽になれることを知ることが出来た。是非、専門職を対象にﾜｰｸをして欲しい。
- 全く分からないまま参加したが、自分自身を見つめる事、相手との違い、短い間でｽｷﾝｼｯﾌﾟから(参加者との)距離感も縮まったと思う。言葉ではないｺﾐﾆｭｹｰｼｮﾝが取れたと思う。
- とても元気になった。緊張して自分が呼吸していない事に気付いた。ﾌﾟﾚｯｼｬｰも自分でかけているが、ﾘﾗｯｸｽも自分でするものだと思った。深呼吸して、自分のそこそこ好きな仕事に戻って行こうと思う。

２．言語療法

- 本日の研修は、前半、難しいと感じた。
- 薬について学びたい。
- STとの関係性以外も様々な人々の力を借りていきたいと思った。
- 自分の理解の甘さを感じた。

３．ぱーくすカフェ体験

- 障害のあるなしに関らず、「人」としての付き合いが大切だと思った。当事者と一緒にﾜｰｸが出来たことは、有意義な時間を共に過ごすことが出来た。
- 良い時間を過ごせた。
- 何か催しがあれば声をかけて欲しい。(清水敦史)
- 楽しかった。
- 皆さんと一緒に作業することで、親しくおしゃべりすることが出来ることを体験した。
- 機会あれば、また是非参加したい。勉強になった。
- 当事者の方が普段どのような事でお困りなのか、支援者に求められることをもっと詳しく知りたい。
- 若年の方対象ではないが、認知症カフェに関った。地域にﾁﾗｼを配布したが、なかなか参加していただける方が居なくて困った。ｾﾐﾅｰを開催した時は少し反応あるが、継続しなかった。

若年性認知症の人のための
生きがいづくりプログラム研修２

当法人は、居場所やプログラムを活かし、本人の新しい生き方を応援してきました。
これらの具体的なプログラムは、認知症による障害をサポートする視点や、
より脳に心地良い刺激をもたらすことができるように考慮して行われています。
皆さんも自分が体験し、プログラムを応用していくヒントをつかんでください。

デイサービス、カフェのプログラム再考に

２０１８年９月７日（金）＊運動しやすい、スカート以外の服装で参加してください。

タイムスケジュール	研修テーマ・講師	内容
【講座１】 10:30～12:30	脳とからだのワーク 講師：堤奈津子	体を動かす、人と触れ合う、自分のことを話すなどことが、脳に与える影響を体験する講座です。 プログラムの体験 ・他者にふれる、ゆだねる ・自分を紹介する ・自分を感じる
【講座２】 12:45～14:45	居場所を通じた支援２ 講師：沖田裕子	午前中の体験の振り返り。 ルールの決まったプログラムの体験との違いを感じてみる。 自己肯定感がもてる場面つくりについて

講師紹介

堤奈津子　アレクサンダー・テクニーク教師、リビング・イン・ア・ボディ インストラクター

沖田裕子　看護師　重度認知症デイケアで働いていた時に、若年性認知症の人と出会い。サポートを続けて２０年

場所：スタジオ　フロイデ　（法人事務所にて集合後、移動）　　定員２０名
時間：１０時～１６時４５分（受付９時 45 分から）
参加費：１講座５，０００円（２講座連続受講 10,000 円、賛助会員は 9,000 円）
対象：認知症の人をサポートするすべての人

＊受講費は、事前振込をお願いいたします。一旦振り込まれた受講費は、返金はいたしません。
＊受講費を振り込まれた方には、受講票を発行いたします。
＊専門士の認定は１講座ごとに行います。２時間２単位となります。

本研修は、社会福祉振興助成を受け実施するものです。
主催：特定非営利活動法人　認知症の人とみんなのサポートセンター
後援予定：日本認知症ケア学会

若年性認知症の人のための
生きがいづくりプログラム研修３

当法人は、居場所やプログラムを活かし、本人の新しい生き方を応援してきました。
これらの具体的なプログラムは、認知症による障害をサポートする視点や、より脳に心地良い刺激をもたらすことができるように考慮して行われています。
特に若年性認知症の方の中には、言葉の障害を記憶障害と間違われたり、ものごとを理解できないと誤解されることが多くあります。言葉の障害の特徴を知り、本人の求める生活へと近づけていきましょう。

２０１８年9月２９日（土）

タイムスケジュール	研修テーマ・講師	内容
【講座１】 10:00～12:00	言語療法 講師：安井美鈴	若年性認知症の人への言語療法の意味と、生活障害の改善 失語の種類について
【講座２】 13:00～15:00	居場所を通じた支援３ 講師：沖田裕子	失語の種類とその対応方法、居場所の活用方法。 家族や支援者へのサポート方法、アセスメントの視点

講師紹介

安井美鈴　大阪人間科学大学医療心理学科言語聴覚専攻教員、言語聴覚士

沖田裕子　看護師　重度認知症デイケアで働いていた時に、若年性認知症の人と出会い。サポートを続けて２０年

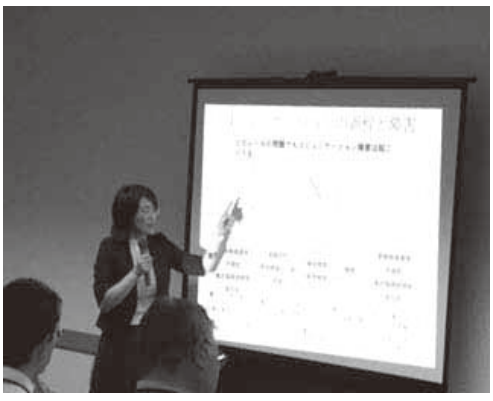
場所：ドーンセンター　中会議室　（大阪市中央区大手前 1－3－49）

定員３６名

時間：１０時～１５時００分（受付９時 45 分から）

参加費：１講座５，０００円（２講座連続受講 10,000 円、賛助会員は 9,000 円）

対象：認知症の人をサポートするすべての人



認知症カフェの
つくり方

12月22日（土曜日）

若年性認知症の人のための
生きがいづくりプログラム研修

当法人は、居場所やプログラムを活かし、本人の生きがいと新しい生き方を応援してきました。
その一つとして、認知症カフェを2012年から始めています。当法人では、居場所としての認知症カフェをめざしており、アートとアロマのワークを継続して行っています。今回、皆さん自身にプログラムを体験していただき、応用するヒントをつかんでいただきたいと思います。
あなたも認知症の人と一緒にカフェに参加してみませんか？

タイムスケジュール	研修テーマ・講師	内容
【講座】 10:00～11:30	居場所を通じた支援 講師：杉原久仁子	若年性認知症の人にとって「居場所」なぜ必要なのでしょうか。 本人や家族への初期支援の重要性をお伝えします。
【演習】 12:30～14:30	カフェ体験 ＜アートワーク＞ 講師：平井美穂 ＜アロマセラピー＞ 講師：山本直美 *アートワークもアロマセラピーを選択していただきます。	当法人で行っているカフェを会場で再現します。アートワークとアロマセラピーのテーブルに分かれます。認知症の当事者たちと一緒にカフェへの参加を体験してみましょう。 ＜アートワーク＞ 失認や失行があっても、絵を描き自己表現する楽しさが実感できる、そんな絵画的技法を、実技を通して体験します。 ＜アロマセラピー＞ 脳を直接刺激するアロマの活用を体験する講座です。 アロマオイルの効果と、活用した物づくりを行います。
【演習まとめ】 14:45～16:00	講師：平井美穂 山本直美 タックメンバー 杉原久仁子	参加者の皆様のカフェ体験を振り返り、「居場所」はどうあったら良いのか。どのような要素が重要であるかを学びます。

場所：大阪市社会福祉研修・情報センター　４階　会議室　　定員５０名
時間：１０時～１６時００分（受付９時45分から）
参加費：１講座１，０００円（２講座連続受講2,000円、賛助会員は1,000円）
対象：認知症の人をサポートするすべての人

＊受講費は、事前振込をお願いいたします。一旦振り込まれた受講費は、返金はいたしません。
＊受講費を振り込まれた方には、受講票を発行いたします。
＊専門士の認定は１講座ごとに行います。午前中は１単位、午後は３単位となります。

本研修は、社会福祉振興助成を受け実施するものです。
主催：特定非営利活動法人　認知症の人とみんなのサポートセンター
後援予定：日本認知症ケア学会

WAM助成　独立行政法人福祉医療機構　社会福祉振興助成事業

（2）アートワーク展覧会とワークショップ

研修の機会だけでなく奈良市のカフェ、葉音の協力により、アートワーク展覧会を開催し、3 月 9 日にはワークショップを行った。地元の奈良新聞も宣伝をしてくださった。

奈良新聞掲載記事

2019 年 2 月 21 日

■認知症の人とみんなのためのアートワーク展

24日～3月23日（月火定休）11時30分～19時／初日16時から 奈良市後藤町のとおく＆らいぶカフェ葉音（ばおん）。認知症の人のためのアートワークは簡単な技法で「世界に一つだけの作品」が作れる絵画活動。カフェで食事や飲み物を楽しみながら、個性豊かな作品をゆっくり鑑賞。3月2、16日は同店でライブイベント開催のため展覧会のみの鑑賞は不可▷3月9日14～16時、アートワーク体験「春の花を描こう！」。制作を体験しながら若年性認知症やアートワークについて語り合う。参加費800円。お茶付き。定員10人。参加費は若年性認知症の人のアートワーク活動に活用。展覧会の問い合わせはＮＰＯ法人認知症の人とみんなのサポートセンター、電話06（6972）6490。体験の申し込みは同カェ、電話

奈良市のカフェ、葉音の協力で 2019 年 2 月 24 日～3 月 23 日アートワーク展覧会を開催し、3 月 9 日にはアートワークミニワークショップショップを行った。 地元 の奈良新聞も宣伝をしてくださった。ワークショップでは、制作の後、実際の アートワークの動画を見ながら、若年性認知症の人の出来ることや苦手なことなどについても伝え、診断後の暮らしに必要な支援についても伝えた。ワークショップの参加者からは、同じ年代の人と交流することが必要、その人らしく生活できる社会になることが望まれるなどの感想があった。

奈良新聞掲載記事 2019 年 3 月 16 日

個性豊かなアート並ぶ

認知症の人の作品展

奈良

若年性認知症の人が描いた個性豊かな作品の展覧会「認知症の人とみんなのためのアートワーク展」が、奈良市後藤町のとおく＆らいぶカフェ葉音で開かれている。23日まで。

「アートワーク」はケアワーカー平井美穂さん（46）＝大阪市＝らが考案。誰もが楽しくアートに取り組める活動で、綿棒や指などで描き、貼り絵の要素も交えて制作する。作品の完成体験は、認知症の人が達成感や自己肯定感を味わう貴重な機会になるとされる。

会場にはNPO法人「認知症の人とみんなのサポートセンター」（大阪市）が定期開催する「はーくすカフェ」で、平井さんと一緒に制作した若年性認知症の人の小作品二十数点を展示。淡いピンクが美しい「しだれ桜」や、深みのある色合いが神秘的な「花火」など多彩な作品が並ぶ。

入場無料。午前11時半から午後7時開場。月・火曜休。きょう16日は、同店でライブイベントがあるため展覧会のみの鑑賞はできない。問い合わせは同店、電話0742（27）5972。

個性豊かな作品が並ぶ会場＝奈良市後藤町のとおく＆らいぶカフェ葉音

３.「タック」の各プログラムの継続と「タック」を実習の場とした人材育成

（1）実習受入

「タック」の各プログラム・居場所を継続させ、本事業研修参加者が実際の活動の場で実習を行うことによって、より実践的なプログラム運営や居場所づくりを行えるように実習の場を想定した実習参加者にチラシを配布して参加を呼び掛けた。

プログラム名	実習参加日	実習参加者
脳とからだのワーク	11 月　6 日	男性
	12 月　4 日	女性
	2 月 28 日	女性
ぱーくすカフェ	2 月 21 日	女性

◎見学者の感想

・準備から片づけまで、全員で行ない“皆で参加”感を感じた。

・お互いに冗談を言い合い、ちょっとした物忘れもフォローしあって楽しい時間を過ごしておられると感じた。

・雰囲気の大切さを改めて感じたので、日頃の業務でも大切にしていきたい。

若年性認知症の人のための生きがいづくりプログラム見学実習

以下の内容を記入し、メールもしくは FAX にてお申込みください。
（締切は、ご希望の日の１週間前）

FAX：０６－６９７２－６４９２　メール　minnano.spc@ktf.biglobe.ne.jp

ご希望のプログラムに○をつけ、必要事項を記入してください。			
	プログラム名	実施日時	参加の希望日時を記入ください
	脳とからだのワーク	毎月第１、第３火曜日午後	第１希望日 月　日　（　）午前・午後
	くるみボタンづくり	月曜日、木曜日、金曜日	第２希望日 月　日　（　）午前・午後
	言語療法	月曜日　時間は未定	第３希望日 月　日　（　）午前・午後
	ぱーくすカフェ	毎月第３木曜日午後	

ご希望の日時がすでに定員を満たしている場合は別の日を調整させていただくことがあります。

お名前　ﾌﾘｶﾞﾅ	性別	電話番号（日中連絡がつく番号）
所属		職種
ご住所 〒　＊職場の場合は職場名まで記入		メールアドレス（必ず記入ください）
2018 年 3 月以降の当法人の研修（該当するものに○をしてください） 受けたことがある　受けたことがない		

＜会場案内＞

地下鉄鶴見線地線「玉造駅」より７分
JR「玉造駅」より３分
http://minnanospc.grupo.jp/

（2）プログラム継続

プログラムとして、①ぱーくすカフェ（アートワーク、アロマ)、②脳とからだのワーク、③言語療法を行った。①は月１回、認知症カフェとして実施し、アートワークは２カ月に１回の家族会でも実施した。②③は１カ月２回実施した。⑤上記の他にタック活動として、くるみボタンや外出行事、制作活動の日を設けた。①、③については予約制とした。１カ月平均して平均して１日６人の参加があり、プログラムがある日の方が参加者が多かった。

①ぱーくすカフェ（アートワーク、アロマ）　平井美穂　山本直美

アートワークとアロマセラピーのワークショップを隔月で行った。少人数で行ったことで、会話を重視できた。ワークショップ後のカフェは緊張感が高い人が、体を触れ合うことで緊張が緩和し体調不良を訴えなくなった。

１）参加者状況

実施日：第３木曜日（１３：００～１５：００）

４／１９、５／１７、６／２１、７／１９、８／１６、９／２０、１０／１８、
１１／１５、１２／２０、１／１７　全１０回　（２／２１、３／２１予定）

	平均参加人数		述べ参加人数	
	ワークショップ	カフェ	ワークショップ	カフェ
プログラム参加者	４．６人	４．６人	４６人	４６人
サポートスタッフ	０．９人	２人	８人	８人
ボランティア	０人	０人	０人	０人
その他(家族など)	０．４人	３．７人	４人	３７人

2019.1 月末時点

２）プログラムの内容

◎ワークショップ

・アートワーク

ソフトパステル、スパンコールやフェルトなどの様々な素材を使い、コラージュ作品を制作する。好みの色や感触の違う素材を選ぶ、自己決定の場面を多く作り、自己表現することを通して、自己効力感を高めている。場を共有する人とのコミュニケーションを促進し、場の安心感につなげる。

・アロマセラピー

好きな香りを選び、その香りを使って匂い袋やルームスプレー、入浴剤などを作成する。香りによる五感や脳への刺激を行い、他の参加者やスタッフなどと心地よい香りを共有することで、コミュニケーションの促進、自己肯定感、場の安心感につなげる。

・カフェ

参加者自らがコーヒー豆を挽いて淹れ、カップ類などの準備、後片付けまでの一連の流れを協力しながら行う。淹れたコーヒーを一緒に飲みながら交流をはかる。

３）プログラムの特徴

・閉じこもりを予防し、認知症になっても安心して出かけていける場所を作る。

・他の参加者との交流、積極的なカフェ運営への参加により、役割を持ったいきがいの場とする。

・アートワーク、アロマセラピーを取り入れたワークショップを行うことにより、五感への刺激や自己表現の場とする。

・介護保険の通所介護などを利用していない人が、カフェの継続した利用を通してグループ活動や自己表現活動に慣れ、スムーズな介護保険制度利用につなげていく。

４）効果として考えられること

・カフェの利用を通して、ご本人ができること、できないこと、隠れてしまっている本来の能力などを適切に評価し、必要な支援を明確にすることができる。またそのことをご家族や関係機関に伝えていくことで、ご本人

への理解や必要な支援につなげることができる。
・継続してプログラムに参加することで、ご本人の状態にあった居場所や生活の場、介護保険サービスの選択などへのソフトランディング的な役割が期待できる。
・参加者同士のつながりや信頼感、安心感が深まり、それらが相乗効果となることで、ぱーくすカフェやその他のプログラムへの効果、認知症の進行予防への好循環となっている。

5）若年性認知症の人や初期認知症の人に有効であったと思われる事項や事例

A さん

1 年 4 カ月（1 月現在）参加を続けている A さんは、当初、「何にもわからない」「忘れてしまうから私は駄目なの」というネガティブな発言が多かったが、カフェでの役割や他者との交流などを通して自信を取り戻され、デイサービス利用へ繋がった。また、新しい参加者に対して、不安そうにされていると「大丈夫よ」など、励ましの言葉をかけて手をさすってあげるなどの、他者への積極的な関わりが見られるようになっていた。しかし、ここ最近、ハイテンションで多弁、両手を急にクルクル回す動作などが見られ、「私、全部、忘れてしまうから、お父さんがしてくれるの・・私、全部、忘れてしまうから・・・私、早く死んでしまいたい」とこれまでに無かった行動や発言が見られるようになった。このことから、ご本人の症状の変化により、夫との関わりに影響を与えているのではないかということに気付いた。継続して利用することで、カフェが気がねなく自分の気持ちを話せる場になっていると考えられ、心境の変化などに気付くことができた。

B さん

1 年 4 カ月（1 月現在）利用を続けている B さんは、当初、最後まで参加することが難しく、途中で退席されることもあったが、カフェの準備や後片付けを自ら積極的に行われるようになり、自分の役割を持つことで最後まで参加できるようになった。しかし、認知症の進行に伴い、ワークショップの途中でも、自分の作業が終了すると、次々に道具を片付け始め、カフェの準備をしようとされるなど、先走った行動が見られるようになってきた。認知症の原因疾患の特徴から、タイムスケジュール的なルールは守れる可能性があることから、本人に説明の上、机にスケジュール表を見えるように置き確認できるようにした。試した結果、スケジュール表を見て「カフェは 14:45 からやね」と言われるも、その直ぐあとに、「カフェの準備しようか」と言われる。その都度、スケジュール表を一緒に確認する事を続けたり、途中で他の作業をして頂いたりすることで、ワークショップ終了後のカフェタイムまでの時間を過ごして頂いた。サポーターが繰り返し時間を伝えることや別の作業をお願いすることに対して、本人がイライラする様子は見られず、ワークショップや別の作業があると、その間は作業に集中できる様子であった。関わったサポーターからは、「時間を守り行動することは難しかったが、スケジュールを見て一緒に確認することで、ご本人への声かけがしやすかった」「他の作業を途中で鋏むことも特に嫌な様子ではなく、集中して作業しておられた」との意見があった。スケジュール表がある方が声かけがしやすく、カフェの準備以外の作業も受入られていることから、今後も、スケジュール表使い、他の作業も取り入れながらご本人の様子の変化を見ていきたいと考える。カフェに継続して参加することで、ご本人のストレスにならない関り方を考えていくことができ、これを、次のサービスへつなぐための手掛かりにしたいと考える。

C さん

当初、夫はサービス利用に不安を感じていたが、カフェでご本人が他者との交流を楽しんでいる様子を見て安心し、デイサービスやショートステイも利用できるようになった。しかし、その後も「ここへ来ることを本人が

楽しんでいると感じる」「本人の喜ぶ顔が見られる場所なら、どこへでも参加させたい」という夫の言葉から、「まだ、カフェに参加させたい」という夫の思いが強く感じられた為、フォーマルなサービスに繋いだ後も、インフォーマルなサービスとして参加を継続していた。しかし、認知症の進行に伴って、不安そうに夫を探し外へ出ようとされる様子や、狭い空間での人の声や音に全て反応して答えてしまい、参加者同士の会話に上手く入ることが出来ない、排泄の介助が必要などマンツーマンでのサポートが必要になって来られた。夫には参加時の様子を伝え、ご本人がカフェを楽しめなくなってきていることや、今のご本人にとって必要な環境についても説明し、これからは介護サービスに絞って利用していくことが望ましいことを少しずつ伝え続けた。その結果、夫の理解を得ることが出来き、1年4カ月でカフェ参加を終了した。このように、ご家族の「思い」が求める環境やサービスと、認知症の進行に伴ってご本人が必要としている環境やサービスにズレが生じることがある。このことから、カフェには、ご家族の思いを汲み取りながら、ゆるやかにサービス利用開始を促し、また、ゆるやかに次のサービスへ移行していく、ソフトランディングの役割があると考えられる。

D さん

D さんは、意味性認知症により、コミュニケーションが上手くとれず、退職後は自宅に閉じこもりがちになっていた。また、これまで出来ていたことが難しくなってこられ、適切なサポートが受けられていないため、活動量が低下している様子があった。そこで、集団の中での他者との交流に慣れるや、本人に必要なサポートが何かを知ることを目的としてカフェの参加が始まった。（同時に言語療法も受けられいる）ワークショップのアートワークでは、選択肢をいくつかに絞っていくことで、自分の好きな色や素材を指さして選ぶことができ、描き方を見せたり、手を添えして初動を促すことにより、パステルを使って自ら描くこともできた。また、アロマテラピーでは、精油の香りを選ぶ時、「うーうー」と声を出して嫌がったり、にこりと表情を変えたりすることで、自分の好みを意思表示することができ、仕草をしてみせることにより、材料を容器に加えたり、混ぜたりすることも出来た。作品や品物が完成すると、嬉しそうな表情が見られ、もの作りを楽しむことができることがわかった。また、スマホの画像を利用することで、本人の好きな食べものや歌などを知ることができ、その話題を通してご本人の笑顔を引き出すことができた。カフェタイムの準備では、サポーターが皿やカップを手渡すと、それをセットすることができ、菓子を見ると自ら皿にのせて下さるなど積極的な様子が見られるようになった。また、サポーターを介さず、参加者同士で協力して食器を片づける、参加者に手を握り挨拶されるとニコニコと微笑むなど、参加者との直接的な交流も見られるようになった。全体の会話の流れについていくことは難しいものの、個別に問いかけをすると表情を変え頷かれたり、声を立てて笑われたりとリラックスして、その場を一緒に楽しむことができるようになった。ご家族にこのような様子を伝え、デイサービス利用へと繋がった。

②脳とからだのワーク　　アレクサンダー・テクニーク教師　堤　奈津子

1）参加者状況

実施日　2018年5月より、2週に1回、13：00～14：30まで実施、合計23回実施（2019年3月末までの予定）
参加人数、延べ参加人数：115人（2019年1月末まで16回分、本人115人、家族2人、見学1人、GH ガイドヘルパー17人）
平均参加人数：7．7人（2019年1月まで16回分、本人6.6人）

講師：アレクサンダー・テクニーク教師　堤　奈津子
スタッフ：1～2名

参加人数　2019年1月末まで その後3月末までに7回実施

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
日付	5月15日	5月29日	6月19日	7月3日	7月17日	8月7日	8月21日	9月18日	10月2日
参加	6	5	4	5	8	6	8	9	9
家族	1	0	0	0	0	0	0	0	1
見学	0	0	0	0	0	0	0	0	0
GH	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	8	7	5	6	9	7	9	11	11

	10	11	12	13	14	15	16	延べ人数	平均
日付	10月16日	11月6日	11月20日	12月4日	12月18日	1月15日	1月29日		
参加	7	0	7	9	9	8	5	115	6.6
家族	0	0	0	0	0	0	0	2	
見学	0	0	0	0	0	0	0	1	
GH	0	0	0	0	0	0	0	17	
合計	8	0	8	10	10	9	5	135	7.7

2)プログラムの特徴

このプログラムは、

「生きがい」

「楽しみ」

「安心して自己表現、気持ちを言語化出来る居場所」

「思い切り身体を動かし、声を出す」

「自身でも囚われがちな認知症という病気のイメージから自由になる」

「進行を遅らせる」

などを意図して開催されています。

具体的には、以下のようなツールを使用しています。

【演劇】

アイスブレイク、ゲーム、ストレッチ、リラクゼーション、身体訓練、自己表現、他者と協力して何かに取り組む・息を合わせて一緒に動く、などの要素をクラスに取り入れています。

【アレクサンダー・テクニーク】

身体と心のつながり、そしてあたまと言葉とのかかわり合いを含めた、自分自身の使い方の学習法。

部分ではなく、その人全体に働きかけます。人が元々持っている協調作用が起こることで、心身機能全体の改善と、人生全体の質の向上が望めます。

参考:http://alexander-tech.jp/info

【NVC(非暴力コミュニケーション)】

このクラスでは、人間の持つ普遍的な「感情」と「ニーズ」の書かれたカードを使い、「自分自身や他者とのつながりやコミュニケーションの質を高める」、「正直な感情や自分が大事にしたいことに気づくことでエンパワーされる」などの効果を意図して、部分的に取り入れています。

参考:http://nvc-japan.net/nvc/

【クイック・コヒーランス】
心臓と脳の協調を促す簡単な瞑想。心身の回復力を高め、ストレスに強く、幸福感に繋がりやすくなる、パフォーマンスを上げるなどの効果がある。
【タッチ・ケア】
認知症を悪化させる脳の興奮や不安を減少させます。

他にも、「ニューロ・ムーブメント」、「ソマティック・エクスペリエンス」、「多重迷走神経理論」などを参考にしています。

3）大切にしていること

「真ん中で出会う」
参加者の皆さんが、喜んで取り組んでくださるワークの一つに、「二人組になって、背中合わせで座り、もたれあう」というのがあります。
まずは、言葉に頼るのをやめて、ただ背中で相手のことを聴くところから始めます。相手の呼吸の動きや暖かさや柔らかさを感じて、ただそれを受け取ります。自分自身にも、同じような質があることを思い出したりもしながら。
次に、「ちょうど真ん中で出会う」ことを意図して、相手に自分の身体の重さを委ねて行きます。そうすると、支えてもらいながら同時に相手を支えている、というようなことが起こってきます。自分の重さが、「頼る」ことが、相手を支えている。相手にとっても同じです。ひょっとしたら、普段は馴染みの薄い捉え方かもしれません。
どちらかだけが頑張って無理するのでも、合わせるのでもない、「ちょうど真ん中で出会う」は、心身ともにいい塩梅で楽チンな関係性ともいえます。そして、生きて呼吸して変化し続けている私たちの「真ん中」は、常に同じところではあり得ません。だから敬意と好奇心を持って、聴き続ける必要があります。そのことで見えてくるのは、実は自分自身だったりもします。誰かが触れてくれることで自分が分かる。とってもシンプルなこのワークが連れて行ってくれる居心地の良い状態は、「脳と身体のワーク」のクラスで大切にしていることを象徴してもいます。

タックでは、「ただ自分であること」が誰かの助けになり、そのことが自分の支えにもなっているような場面を当たり前に目にします。
病気があってもなくても、一見支援する立場でもされる立場でも、私たちには互いの存在そのままが誰かの助けになっている、ということがあるのだと気づかされ、「良い」「悪い」のない世界への入り口でもある、「真ん中で出会い続ける」を毎回クラスのたびに新しく大切に思っています。

4）約2年継続して見られる変化や効果

・昨年からの積み重ねが様々な側面で感じられた。
・言葉での理解が得意、目で見て真似をする方法での理解が得意、講師の手を使って動きを伝えると理解出来るなど、お一人お一人に必要なサポートが明確になってきた事で、出来ることが増えた。
・より安心で安全な場になってきている。

〈具体例〉

1. **メンバー同士でのサポートの充実**

過去に取り組んだワークの手順を身体で覚え、新しい参加者に対して、手順を伝えたり、横でサポートする場面が見られた。

新しいメンバーが概ね２度目の参加から場に馴染む様子が見られるのも、お互いにサポートし合い、そのままを認め合う関係性、安全な場が出来ているからではないかと思われる。それが、それぞれの個性や正直さを発揮することが出来ることに繋がっている。

２．全体性を取り戻し、肯定的な発言が増えた

自分に対して批判的な表現が多く見られた方も、自分で自分のよい面を見て認めることや仲間からの褒め言葉を受け取ることができるようになってきている。

３．ワークやゲームの複雑化やバリエーションへの対応

１年目は、１個から始めたクッシュッボールを使ったゲームも、10 数人で５～６個を同時にやりとりできるまでになった。２年目は、講師が来るまでの時間を使って、メンバーとスタッフのみで様々なバージョンをウォーミングアップとして楽しむことが出来るようになった。

他のゲームにおいても、誰かの思いつきや間違いから、思わぬ方向へ展開して行くのを楽しんで受け入れて行く力がある。これは他の大人のクラスではなかなか見られないことである。脳は新しいやり方で活性化するため、バリエーションへの豊かな対応力に手応えを感じる。

４．身体的機能の維持向上

ストレッチやリラクゼーション、声を出すワークにおいても、手順が身につくとともに、出来ることが増え、積み重ね効果による身体的な機能の維持向上が見られる。体幹がしっかりし、歩行が安定して人もいた。

５．苦手意識がなくなってきた

このクラスでは「やりたくないことはやらなくていい」というスタンスで、参加者の方が選択できるようにしている。

一年目は、顔をくしゃくしゃにしたり、声を出すワークは、人目を気にしてか抵抗を覚える方もいたが、寝転んでお互いの顔が見えない状態でやるなどの段階を経て、積極的に楽しんで取り組めるようになっている。

自己表現に苦手意識があった人も、自由に楽しむ様子が見られている。

６．ワークの効果を理解し、切り替えができるようになってきている

他のメンバーと一緒に和気あいあいと楽しむ時間と、それぞれが身体の感覚や自分の感情やニーズと繋がる静かな時間と、その時々の切り替えが出来るようになってきている。

１年目は、メンバー同士盛り上がりすぎて、プログラムの意図とは外れてしまうこともあった。

７．より繊細にワークに取り組むことができるようになっている

ストレッチや体操において、無駄な頑張りが減ることで、感じることが増え、より効果的に動けるようになっている。

マッサージ等相手に触れる必要のあるワークにおいて、はじめは相手を見ずにやりたいようにやってしまう方もいたが、一時停止して小さい動きからはじめ、相手を感じ、温かさ呼吸を感じるように誘導すると動きが変わってくるようになった。

相手と一緒にペアになって動くワークにおいて、相手を感じながら一緒に動いたり、非言語のやりとりの質に向上が見られた。

８．ご家族やヘルパーさん等との共有

このクラスでは、同行されたご家族やヘルパーさんも一緒に受けて頂いている。日常ではない触れ合いの機会に、うれしそうなご様子が見られた。言葉では伝えにくいことや、人として必要なことは同じであるというような共有を、体感として出来ているのではないか。

などのことが挙げられた。また、今後につなげていくために、作業療法や理学療法のセラピストおよびアレクサンダー・テクニーク教師数名に見学してもらい、脳の活性化や認知症に良い要素で、当日のワークにあったものをあげてもらった。

感想①
みなさんが「自分が前はできていたことができなくなった」ということを、みなさんの前で話せていることがすごいと思いました。表現できる場があり、そこで表現することで「自分の今」を受け入れられることがあると思います。それができるのは、「お互いに受け入れる場」になっているのだなあと思いました。 それは、心地よさが場にあるからだと思います。 脳に必要なのは「快刺激」です。 講座のなかで、身体に触れ合ったり、話したり、聞いたりという活動で、自分の外の情報に触れたり、体を動かして自分の内感覚に注意を向ける活動がありました。それが、心地よさにつながるように、とても配慮されていたと思います。 認知症の方は、さまざまな症状が出ますが、感覚の処理が難しくなることがさまざまな混乱を生むと思います。 そして、状況がわからなくて取り残される不安から、閉じこもったり、周りの刺激が怖くて攻撃的になったりします。そうして身体を固くすることがバランスを悪くすることにもつながります。 自分の五感と身体感覚を開いて、周りの人と関係をもって、言語、非言語のコミュニケーションをとるワークが多くありました。認知症の方は、言語のコミュニケーションからむずかしくなることが多いと思いますが、他の手段のコミュニケーションを体験することはとても重要だと考えます。

感想②
認知症の症状の一つに、身体のオリエンテーション障害があります。脳と身体のワークでは、お互いのカラダに丁寧に触れあうことや、身体の過剰な筋肉緊張を手放していくようなワークが行われていました。
これらのことで、自身のカラダが明確になり、認知症症状全体の改善に繋がる可能性があるのではないか、と考えます。

感想③
新しい事をする事が認知面に良いとされています。「やりたくないことはやらなくて良い」という基本ルールの中で安全に、楽しく、新しい動きを行えている事も認知症予防の一つになるのではないかと考えます。

今後も、これらの要素を入れた脳とからだのワークを他の人でも実施できるようにするためには、内容ごとの目的やねらいを明確にし、教授できる方法を考え、研修などで伝えていけるようにしたいと考える。

③言語療法

１）実施状況

実施期間：２０１８年４月から２０１９年１月末まで　月２回　計２０回　延べ６４名

対象者　：男性３名　女性３名　計６名の若年性認知症の人

2018 年 4 月～2019 年 1 月月別実施数

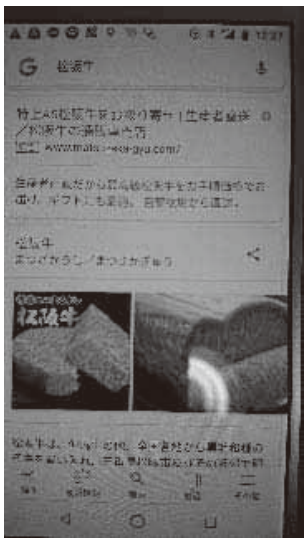
4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月(14 日のみ)	計
11	8	4	7	8	6	7	6	6	1	64 名

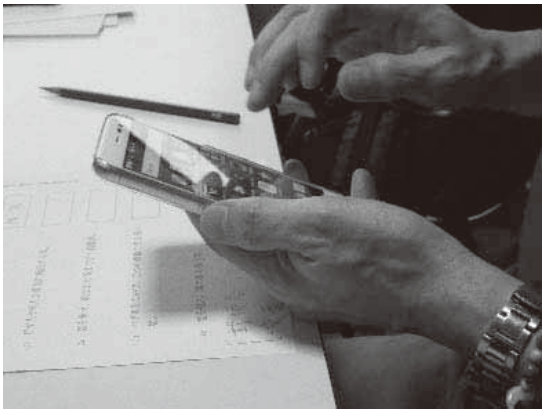
２）実施目的　対象者の言語機能の維持と社会復帰，家庭内復帰に向けた支援を行う。

３）言語訓練及び支援内容

A さん

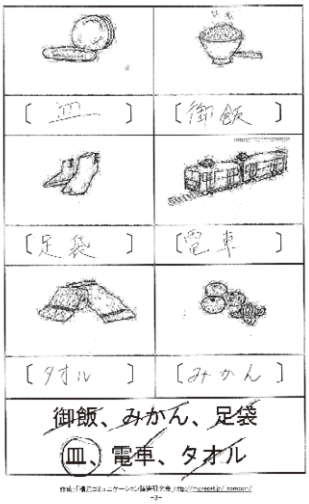
日常会話の理解はできたが、時に「クジラってなんですか？」のように意味理解の障害が見られた。スマートフォンの文字入力機能は保たれておられ、スマートフォンの検索機能もしばしば使われていた。また、趣味のドライブされた時スマートフォンで景色を撮影され、その写真を見せながらお話をする、ということもされていた。言葉の理解が困難な時、その言葉をスマートフォンで検索し理解するという方法を設定し、言語訓練と並行し実施した。また、言葉で言えない時に、その言葉を絵やジェスチャーで表現するという言葉以外の方法も訓練した。

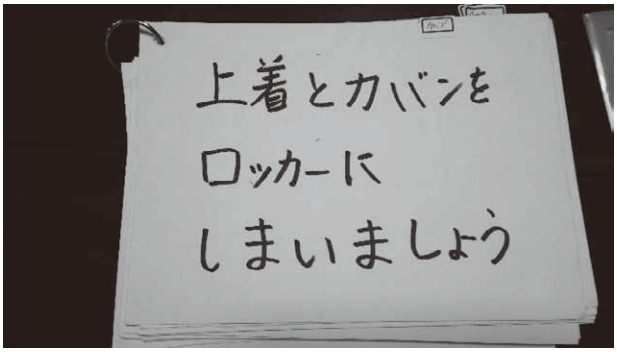




B さん

最初、質問に答えられることは見られず、時々部屋の時計を指さし「〇時やね」と確認されることや「何歳？」という言葉のみが見られた。絵と文字の組み合わせが少し可能だったため、これを利用して理解訓練を実施した。簡単な理解可能となり、自発語も見られるようになった。デイサービス等の利用も可能となった。デイサービス利用開始時、職員へご本人とのコミュニケーション手段について説明も行った。





C さん

最初、自ら言葉を発することも、また、質問に答えられることも困難であった。絵と文字の組み合わせが少し可能だったためこれを利用して理解訓練を実施した。数回の訓練後、訓練に対して「いやや」という発語が見られるようになった。そこで、「はい―いいえ」や「これが好い」等の選択を可能にする訓練を行った。訓練内容は、『「緑茶」,「コーヒー」,「紅茶」から飲みたいものを選び、実際にお茶を入れて飲む」』模擬場面を設定し実施した。また、施設内のワークショップ参加や機能低下後を見据えた対応を行った。様々な場面で選択表現が出現した。社会資源可能性評価が向上し、利用につながりやすくなった。

家　族　　X 年 7 月記入　←は変化を示す

	項目	大	←社会資源利用可能性→	小
1	サービス利用に対する積極性	あり	⑤←④・３・２・１	なし
2	制度の手続き力	あり	⑤・４・３・２・１	なし
3	時間の余裕	あり	５・４・３・②・１	なし
4	家族の抱え込みがない	抱え込みがない	５・④←③・２・１	抱え込んでいる
5	家族の困り具合の認識	困っている	５・④←③・２・１	なんとかやっている
6	本人の喜びへの共感	感じられる	⑤・４・３・２・１	感じられない
7	周囲からのサービス利用への後押し	あり	５・④・３・２・１	なし
8	告知について	本人に言える	５・４・③・２・１	本人に言えない
9	家族会への参加	参加	５・４・３・２・①	不参加
10	思考の整理や決断	整理できる	⑤←④・３・２・１	混乱
11	他者にゆだねられるか	ゆだねられる	⑤←④・③・２・１	ゆだねられない
12	世間体や外聞を気にする	気にしていない	⑤←④・３・２・１	気にする
13	地域の人に公表している	している	５・４・③・２・①	していない
14	経済的余裕	あり	５・④←③・２・１	なし

本　人

	項目	大	←社会資源利用可能性→	小
1	家からの外出	好む	５・④←③・②・１	好まない
2	家族がそばにいなくても落ち着く	落ち着いている	⑤←③・２・１	落ち着かない
3	皆と一緒の飲食	できる	⑤←④・３・２・１	できない
4	トイレ(介助しても)	行ける	⑤・４・３・２・１	我慢
5	希望を言える	希望を言える	５・④←③・②・１	希望が言えない
6	できないことを隠さない	隠さない	５・④←③・②・１	隠す
7	人に頼れる	あり	５・④←③・②・１	なし
8	意欲	あり	５・④←③・②・１	なし
9	自分なりに利用する意味がある	あり	５・④←③・②・１	なし

「若年性認知症の就労や生きがいづくりのためのアセスメント」
シート６社会資源活用
←が変化を表す。
右から左に社会資源の利用可能性が大きくなった項目が多かった。

4）今後の課題

言語訓練を実施することでコミュニケーション能力は改善されるが、病気が進行していくため改善された能力をどのように保てるか、また進行に伴う能力低下にどのような支援が必要かを検討していくが重要である。

2019 年度第 20 回日本認知症ケア学会で発表予定である

４.「タック」メンバーによる当事者相談『タックドア』

若年性認知症の当事者が、当事者の悩みを聞く。特に診断前や、診断直後の人の相談をうける体制をサポートする内容とし、タックドアとして、１カ月に２回２時間程度の活動を行った。

日付	４月８日	５月 13 日	６月 10 日	６月２９日	７月２７日	８月１７日	８月３１日
人数（名）	6	5	3	2	3	4	4
日付	９月９日	９月 28 日	10 月 14 日	10 月 26 日	11 月 11 日	11 月 30 日	12 月 14 日
人数（名）	4	3	3	3	2	5	4
日付	12 月 28 日	１月 13 日	１月 25 日	２月 11 日	２月 22 日	３月 10 日	３月 29 日
人数（名）	2	2	3	4	2	4	

６月２９日は、学生２名の参加、８月３１日は支援者１名の参加があった。

話し合いを中心に行うものと、イベントを楽しむことを行ったものもあった。

当事者同士の話し合いでは、診断間もない当事者から「知り合いの人にこの病気をいつカミングアウトしたら良いのか」「家では家族はいつもけんかになってしまう。家にいない方が良いのではないかと思う」などの相談が寄せられ、先輩の当事者からは「無理にカミングアウトしなくても自然にまかせたらいいのでは」「友達に言うと楽になる」「認知症だからといってあきらめることはない」「病気とうまくつきあうことが大切」「家族とは仲良く」などのアドバイスがあった。

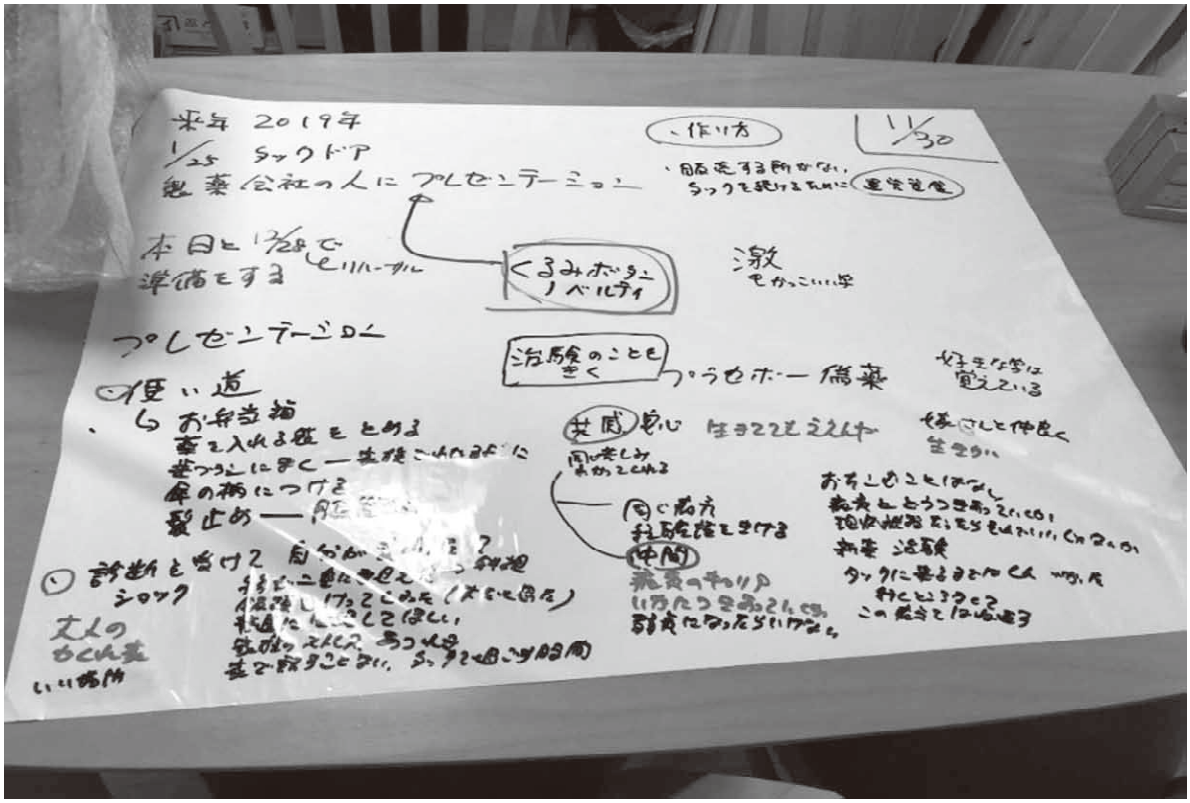
８月３１日のタックでは、外部参加者の提案により、くるみボタンを会社のノベルティ商品として扱ってもらうようプレゼンテーションを行ってはどうかという話になり、９月以降、計３回の準備を行い、２月２２日、３月２６日に製薬会社を対象にプレゼンテーションを行った。

プレゼンテーションの内容は

ⅰ）くるみボタンの使い方と作り方　ⅱ）タックに通う意味として、タックメンバーによる、写真撮影などを行い、準備を行った。

参加した製薬会社の社員からは、「若年性認知症の当事者の方々の不安や、ご家族の想い、そして社会とつながりたいというお気持ちを 知ることができました。普段、直接お話を聴く機会がほとんどないので、非常に勉強になりました。社内でも共有させていただきます」などの感想があった。

プレゼンテーションの内容を考えた



↓プレゼンテーションの実施

一緒にくるみボタン作成→

５．連絡会

各取り組みの進捗管理を行い、支援を行った個々の若年性認知症の人への効果や課題等を共有し検討した。

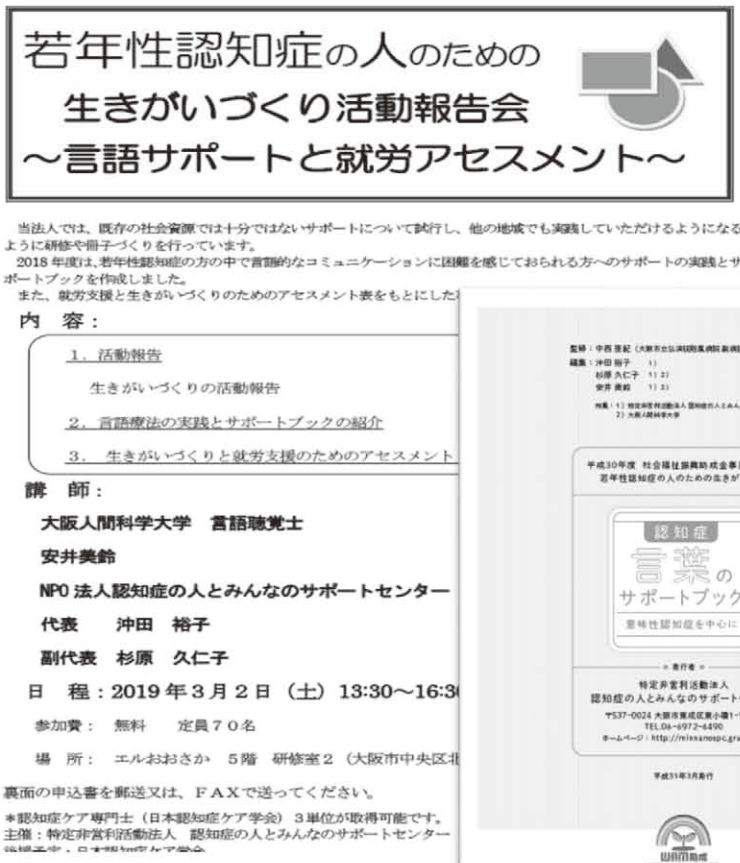
日　時　12 月 24 日（月）10：30～13:00　当法人事務所

出席者　堤、平井、安井、竹内、沖田、杉原

内　容　事業の進捗状況の確認や支援ケースの検討　報告書及び報告会について

６．報告会

日	テーマ・内容	講師	場所	受講人数（名）
3 月 2 日（土）	若年性認知症の人のための生きがいづくりと活動報告会～言語サポートと就労アセスメント～	安井　美鈴 沖田　裕子 平井　美穂 杉原久仁子	エル大阪	70



若年性認知症の人のための
生きがいづくり活動報告会
～言語サポートと就労アセスメント～

当法人では、既存の社会資源では十分ではないサポートについて試行し、他の地域でも実践していただけるようになるように研修や冊子づくりを行っています。
2018 年度は、若年性認知症の方の中で言語的なコミュニケーションに困難を感じておられる方へのサポートの実践とサポートブックを作成しました。
また、就労支援と生きがいづくりのためのアセスメント表をもとにした

内　容：

1．活動報告
　生きがいづくりの活動報告
2．言語療法の実践とサポートブックの紹介
3．　生きがいづくりと就労支援のためのアセスメント

講　師：
大阪人間科学大学　言語聴覚士
安井美鈴
NPO 法人認知症の人とみんなのサポートセンター
代表　　沖田　裕子
副代表　杉原　久仁子

日　程：2019 年３月２日（土）13:30～16:3

参加費：　無料　　定員７０名

場　所：　エルおおさか　５階　研修室２（大阪市中央区北

裏面の申込書を郵送又は、ＦＡＸで送ってください。

＊認知症ケア専門士（日本認知症ケア学会）３単位が取得可能です。
主催：特定非営利活動法人　認知症の人とみんなのサポートセンター

報告会は、新聞に掲載されたこともあり、問い合わせが多数あり定員をオバーした。当日は言語療法の実践により作成した「言葉のサポートブック」を配布し、意味性認知症のサポートについて説明した。アセスメントシートについても配布し説明をおこなった。

参加者アンケート

3 月 2 日（土）若年性認知症の人のための生きがいづくりと活動報告会～言語サポートと就労アセスメント～						
研修の満足度	とても満足		満足	やや不満		不満
人数（名）	20		19	1		0
良かった点	1）役立つ情報が得られた	2）日頃の生活や活動に役立った	3）スキルアップ	4）他の参加者との交流	5）問題、不安の解消	6）その他
	34	20	18	2	1	2

○自由記述

・認知症の方の関り方やアセスメントの仕方のヒントが具体的に話してくれたので良かった。

・意味性認知症という言葉を初めて知った。言葉は理解出来なくても物を見ればわかる。ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝを取りづらいので、代替えのｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝを使えば通じるものがある事を理解した。若年性認知症の方々に仕事の場があり、生きがいを持って生活を送れるようなｻﾎﾟｰﾄがある事を知った。自分の中に情報が少ないと感じた。講師の方々の話がよかった。

・ｱｾｽﾒﾝﾄがいい。頂きに行きます。認知症がもっと自由にじゃべれる様になってほしい。

・内輪ﾈﾀが多かったのが残念。「活動報告会」なので仕方ないかも知れないが。→その分、ﾘｱﾘﾃｨは感じた。

・活動を知ることで自身の励みとなった。

・ｱｾｽﾒﾝﾄを本当に細かくされていると感じた。

・利用者様一人一人についての対応。支援方法が少し見えてきたように思える。

・久しぶりに研修に参加した。ST さんの関りがとても深い学びがあった。「ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ」

・ｻﾎﾟｰﾄﾌﾞｯｸやｱｾｽﾒﾝﾄ表、大変役立ちそうです。今後の活動に活かしたい。

・おれんじﾊﾟｰﾄﾅｰの家族交流会にも若年性認知症の方のご家族が参加される事があり、これからも勉強を続けて行きたい。

・言語療法ということにあまり関わった事がないため、どう言うことを教えられているのか、とても勉強になった。ｱｾｽﾒﾝﾄ表、すごく情報が得られる。包括でも使いたいと思う。

・言語聴覚士の専門性を学ぶことが出来た。(視点の変化)

・意味性認知症についての理解を深める事が出来た。また、若年性認知症の方の思いを知ることが出来た事を今後の支援に役立てたい。

・会場が狭いせいか、ﾊﾟﾜﾎﾟの画面が見にくかった。内容はとても良かった。

・言葉のｻﾎﾟｰﾄﾌﾞｯｸは解りやすく、まとまっていてよかった。

・支援者側の考え方や対応によって、随分、暮らし方や QOL も変わって来る。ｻﾎﾟｰﾄする上でのﾋﾝﾄが得られた

・ｱｾｽﾒﾝﾄ表を記載し、ﾁｪｯｸする事で気付く事が多々あり。活用して行きたい。

・失語症について整理されていて、今まで分かりにくかったが、よく分かった。"

・現場で意味性の方が多いので、勉強した内容で出来る事をし、時間を取り、一緒に関りｻﾎﾟｰﾄして行きたい。今、一番悩んでいる問題です。

・ご本人さんの活躍されている表情が見られて、元気をもらった。ご本人さんが社会と繋がって活躍できる場が、もっと広がって欲しいと思う。

・失語症と認知症の関係について勉強になった。帰って、ｽﾀｯﾌにも伝える。

・意味性認知症(言葉のｻﾎﾟｰﾄ)について具体的な関り方や工夫を聞く機会が少なかったので、非常に学びとなった。本人の能力、出来る事に着目した時、その「出来る事」を実現できる資源や機会が私の勤める市には少ない為、これから取り組んでいければと思う。

・具体的な活動内容が写真と一緒に知ることが出来、参考になった。意味性認知症の話を聞き、利用者の方のあの反応、あの言動は、これによるものなのかな？と思うところもあった。

・若年性認知症の人、本人の活躍できる場、もっとあればと思った。本人はもっとできることがあると、もっと私達が本人のことを引き出して行かないとと思った。(好きな事)

・ｱｾｽﾒﾝﾄ表は「働きたい」というご本人や、このまま高齢のｻｰﾋﾞｽを利用するのに抵抗感がある方に効果的に使えたらと思った。タック等の事業を継続するには、今は助成金があるので良いのかもしれないが、事業継続のための安定したものが必要。

・ﾀｯｸの様な場所があるというだけで安心できるとともに、もっとこのような活動が増えて行けばよいと思った。ｱｾｽﾒﾝﾄ表は高齢者にも使えると思った。

・言葉でのｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝに障害があっても、諦めずに工夫してｻﾎﾟｰﾄする事で生活が変わる事がよく理解出来た。専門職間でのｺﾗﾎﾞも新しい広がりになって、素晴らしいと感じた。

・とても勉強になった。現在抱えている課題に多くのﾋﾝﾄをもらった。

・ご近所さんと週に１回の集いを５年ほどしているが、元々、自分から話をしない方が誰かに質問されても、もじもじされはっきり答えられない。去年ぐらいに娘さんからｱﾙﾂﾊｲﾏｰになったと聞いているが、もしかしたら失語症があるのでは？と思った。今日の話を聞いて、普段、何に困っているのかわからないが、出来る事を支援したい。

・言語療法等具体的な方法が聞けて良かった。

・みんなのｻﾎﾟｰﾄｾﾝﾀｰの活動がどんどん進化、その恩恵を当事者の方達が受けている事がすごくうれしい。歌を歌う。体を動かす。すごくいい。

・意味性認知症，失語，友人や家族に思い当たることがあり大変参考になった。福祉の世界の方々に加え、同居する家族もこの様な知識を得る機会が増えるとよい。

2019年2月27日

読売新聞に掲載

19 くらし 13版 2019年(平成)

くらし 家庭

「意味性認知症」知って

NPO法人が冊子 症例や接し方ヒント

大阪市のNPO法人「認知症の人とみんなのサポートセンター」が、言葉によるコミュニケーションが難しくなる「意味性認知症」の特徴や、周囲の接し方のポイントをまとめた冊子「認知症 言葉のサポートブック」＝写真＝を発行した。

意味性認知症は、言葉の理解などに関わる脳の側頭葉などが萎縮して発症する。文字を読み、話すことができるのに、言葉の持つ意味が次第にわからなくなる特徴があり、会話が続きにくいため、ふさぎ込みやすいという。

冊子は10ページで、▽「トイレ行きますか？」と問うと「トイレって何？」と聞き返される▽「椅子」と言えなくて、「ほら、すわるやつ」と言う――などと症例を解説。実物を見れば理解できることや、記憶力は保たれていることなども示し、写真やイラストを交えた会話を心がけるなど、周囲にできる関わり方のヒントも伝える。

同センターは冊子や支援の実例を紹介する報告会を3月2日午後1時半から、大阪市中央区のエル・おおさかで開く。無料で先着70人。冊子は4日以降、希望者に無料で配布する（送料は自己負担）。申し込みは同センター（06・6972・6490、水・土・日曜と祝日は休み）。

独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

編集・制作
特定非営利活動法人
認知症の人とみんなのサポートセンター
沖田　裕子
杉原久仁子
平井　美穂
山本　直美
安井　美鈴
堤　奈津子

平成３０年度社会福祉振興助成金事業報告書１
若年性認知症の人のための生きがいづくり

平成 31 年 3 月発行

〒５３７－００２４　大阪市東成区東小橋１－１８－３３
特定非営利活動法人認知症の人とみんなのサポートセンター
TEL０６－６９７２－６４９０
ホームページ：http://minnanospc.grupo.jp/